

# 令和4年度 県立竜ヶ崎第一高等学校・附属中学校自己評価表

目指す学校像	10年先を透徹した生徒主体の探究学習 <b>【高潔】</b> 自立した国際人の育成に向け、「一高」としての高い使命を貫徹する <b>【誠実】</b> まっすぐ学びに向き合う、誠実で理知的な学びの場となる <b>【剛健】</b> 質・量ともに高い結果を目指し、あくなき挑戦を続ける <b>【協和】</b> 異文化に胸襟を開き、受容的で持続可能な社会の範となる		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
ICT・グローバル・探究の特色領域の強化と訴求が堅調に進展した。R5単位制移行・附属中1期生高校進学に向けカリキュラム刷新を行った。教育品質向上のため、教科チーム体制の下で生徒主体の学びの強化を推進した(R5以降も継続)。附属中設置から3年経ち、出向教職員を介した市町村立校からの知識移転が完了した今、中高の垣根のない6年一貫した学校づくりを始める機が熟したと言える。	<b>【生徒】</b> 21世紀の国際社会に通用する主体的な学び手を創る	生徒が主体性を発揮できる自由を創出する	C
	<b>【学校・教職員】</b> 名実一致した合理的で生産的な教育機関となる	グローバル教育を全校での取り組みに昇華させる	B
		地域特性を活かし差別化された学びを提供する	B
		組織の生産性を高める(働き方改革)	A
		ゆるぎなき教科教育の質を達成する	B
	エビデンス・ベースの筋肉質な出口指導を行う	B	
安心・安全の学校環境を維持する	C		
<b>【地域社会】</b> 地域と連携し共に成長する、開かれた学校となる	地域人材を活用した、開かれた教育を推進する	A	
竜一の価値を効果的に伝え支援者を増やす	A		
三つの方針	具体的目標		
「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	10年先を透徹した生徒主体の探究学習 <b>【高潔】</b> 自立した国際人の育成に向け、「一高」としての高い使命を貫徹する <b>【誠実】</b> まっすぐ学びに向き合う、誠実で理知的な学びの場となる <b>【剛健】</b> 質・量ともに高い結果を目指し、あくなき挑戦を続ける <b>【協和】</b> 異文化に胸襟を開き、受容的で持続可能な社会の範となる		
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	<b>【生徒】</b> 21世紀の国際社会に通用する主体的な学び手を創る ICTを活用したアクティブ・ラーニング(自己調整学習)を推進する 多様な学びを促進する学習環境を提供する 生徒が主体性を発揮できる自由を創出する <b>【学校・教職員】</b> 名実一致した合理的で生産的な教育機関となる 学校の向かう方向性を一にする カリキュラム・マネジメントの機能を構築する 組織の生産性を高める(働き方改革) ゆるぎなき教科教育の質を達成する エビデンス・ベースの筋肉質な出口指導を行う <b>【地域社会】</b> 地域と連携し共に成長する、開かれた学校となる 竜一の価値を効果的に伝え支援者を増やす		
「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	本校の教育課程(カリキュラム)ならびに教育課程の編成及び実施に関する方針(カリキュラム・ポリシー)にもとづき、高等学校において学びを深めながら、自らのキャリアを主体的に切り拓くために必要な、十分な基礎学力と学習意欲を有する人材。その上で、社会や自然に興味関心を持ち、それを行動や表現に移してきた人材		

## 別紙様式2 (中高)

評価項目	具体的目標	具体的方策	担当部署	評価		次年度(学期)への主な課題	
【生徒】21世紀の国際社会に通用する主体的な学び手を創る	ICTを活用したアクティブ・ラーニング(自己調整学習)を推進する 多様な学びを促進する学習環境を提供する	6年一貫した探究教育のカリキュラムと授業のひな形、ループリックを確立する	探究	B	A	・左記を実践に移す ・地域課題解決型学習に携わる教員を養成する	
		内進生と高入生による最適な学び合いの環境を設計する(高1の学級設計)	管理職、教務*	A			
		いつでもどこでも円滑にインターネットに接続できるICT環境を維持する	情メ、事務	B	B		・さらに安定して使えるようネット環境を強化する ・飛龍館、図書館の利用価値を上げる創意工夫を行う
		生徒が利用したくなる飛龍館にする(ICT化など)	教務*、情メ	B			
		蔵書・施設の電子化等、図書館機能の近代化を行う	情メ	C			
	R5単位制に向けた教室等のリノベーションを企画・実行する	管理職、教務*、事務	A				
	生徒が主体性を発揮できる自由を創出する	生徒会の自治機能を強化する;附属中の生徒組織を構築する	特活	C	B	・設計や意思決定に生徒を関与させる ・生徒に大胆に委ねコーチとして支える姿勢と技術を身につける	
		HR、儀式、行事における生徒の役割を拡大する	特活	B			
		部活動における生徒の主体性・選択幅を広げる	特活	B			
		生徒主体のルール作りを推進する	生指	C			
	グローバル教育を全校での取り組みに昇華させる	地域交流・姉妹校開拓等を通じ、異文化ネットワークを構築する	グロ	C	B	・さらに異文化体験の機会を拡大する ・ALTを増員する	
		コミュニカティブな英語指導を強化する	英語科	B			
		異文化体験の機会を増やす(行事、修学旅行等)	グロ	A			
	キャリア教育の再生を通じ、生徒の学ぶ動機を強化する	キャリア動向について保護者等を啓発する	管理職	C	B	・総学/総探や土曜講座とキャリア教育を連結する	
		成年年齢引き下げに応じた自覚を促す	生指	A			
	地域特性を活かし差別化された学びを提供する	学校設定科目(白幡××)の成果を評価し、設計を更新する	管理職、教務*	A	A	・刷新したカリキュラムと探究・情報を実践に移し、カリキュラム・マネジメントにより継続的改善を行う ・SSH第3期の準備を行う	
		その他、地域資源を活かした多彩な科目・単元を開発する	管理職、教務*	A			
		ICTの素養と起業家精神を備えた卓越人材を育成する	情報科、探究	A			
		本物の課題発見・解決手法を用いた教材を開発する	管理職、探究	A			
SSH第3期目に向けた検討を行う		管理職、探究	C				
【学校・教職員】名実一致した合理的で生産的な教育機関となる	学校の向かう方向性を一にする	不分明な諸方針の明文化を行う	部長	A	B	・引き続き諸方針の正準化と近代化を行う ・附中における意思決定と連絡のありかたを是正する	
		「ほうれんそう」と起案を徹底する	教頭、主任、部長	C			
		中高のサイロを除去する	改革	C			
	カリキュラム・マネジメントの機能を構築する	校長の補佐機関としての職員会議の機能を回復する	教頭	B	B	・引き続き中間管理の育成とチーム力向上を行う ・学習指導の機能を再興しその方針を再定義する ・データ/エビデンスにもとづく学校運用の仕組みを検討する	
		中間管理(主幹級)の育成と組織化(旧:校務運営会議)を行う	校長	A			
		分散した教務機能を連結し、一貫した学習指導(新Rプログラム)を提供する	教務*	C			
		結果評価(成績・模試・アンケート等)の一本化・質向上を行う	DX	B			
		意思決定のためのBIシステムを構築する	DX	B			
		評議員会、学校評価のガバナンス上の実効性を上げる	校長	A			
	組織の生産性を高める(働き方改革)	業務(会議・手順・儀式等)の簡素化と断捨離を行う	全組織	B	B	・引き続きペーパーレス化・電子化によって効率化する ・部活動計画と特殊業務従事簿など帳票間の一貫性を電子的に担保する	
		人・物・金の動きを(県費だけでなく)俯瞰的に把握し可視化する	事務	B			
		表簿・帳票を電子化する	教務、各分掌	B			
		情報共有を促進・迅速化する	教務、事務	B			

別紙様式 2 (中高)

ゆるぎなき教科教育の質を達成する	教育時事・事例等についての情報共有を活性化する	管理職	B	B	・教科主任の下でチームとして教科専門性向上に努める ・授業評価のフィードバックと助言を継続する ・分析会の実効性を上げるなど
	教員評価の質を向上させる（結果評価）	管理職	A		
	教科の専門性とチーム力を向上する	教務*、教科	A		
	記憶の再生を超え、生徒の思考力を伸ばす	教務*、教科	B		
	シラバスにもとづく計画的な授業実践を行う	教務、教科、教員	C		
カリキュラム・ポリシーにもとづく 6 年間一貫した学びを提供する	6 か年一貫した全体計画・目標を描画する	教務、教科	B	A	・附属中～A コースにおいて 6 年一貫した教育を実践する ・考査・模試の見直しなどの改善策を実行に移す
	土曜講座の効果を検証し目的・実施方法を正準化する	管理職、教務*	A		
	R 日課や 55 分授業、考査、文理類型など既存の実装を評価・改善する	管理職、教務*	A		
エビデンス・ベースの筋肉質な出口指導を行う	国内外の難関／優良大学への進学を支援する	進路、高 3	B	B	・出口戦術を明文化し教職員に展開する ・総合型選抜に繋がる探究活動の実践を促進する
	受験戦術にまつわる最新の知識をまとめる	進路	A?		
	（部活実績も活用した）総合型入試を積極的に推進する	進路、高 3	B		
	出口指導方針を明確化する	進路	C		
アドミッション・ポリシーにもとづく戦略的な生徒募集を行う	ポリシーに合わせた大胆な学検運用を行う	管理職、学検委	A	B	・部活動改革の文脈から特色選抜のあり方を見直す ・特色選抜の文化分野のアピールを強化する
	ターゲット層を戦略的に開拓する	管理職、マケ	B		
	特色選抜の役割を再考する	管理職	C		
安心・安全の学校環境を維持する	清潔で利用しやすいトイレを充実させる	保健、事務	A	A	・コンプライアンス等について啓発と注意喚起を続ける ・危機管理の動きと校外連携をさらに浸透させる ・抱え込まずインシデント情報等を即座に校長に上げる ・保健部、生徒指導部、特活部等各分掌の協力体制を密にする
	個人情報保護方針を定義・運用する	情メ、事務	A		
	一人 1 台環境に応じた情報セキュリティを維持する	情メ	A		
	要注意生徒の状態と対応歴を文書化管理する	保健、生指	A		
	生徒の心の問題に 대응する体制を強化する	保健	B		
	インシデント情報を速やかに伝達・記録する	教頭	C		
	校内での事故・災害を防止する	衛生委	A		
	教職員による不祥事を防止する	管理職	C		
	安全な部活運営を維持する	特活	A		
	正確な事務処理を行う	事務	A		
	会計コンプライアンスを遵守する	事務	A		
	学検におけるインシデント（含：採点ミス）を最小化する	管理職、学検委	A		
【地域社会】 地域と連携し共に成長する、開かれた学校となる	OB / P T A の学校運営への関与を強化する	マケ、特活、学年	B	A	・ホストファミリー募集、探究など目に見える P T A の関与を実現する ・筑波大とのタクソノミー研究を S S H 成果に昇華する ・茶話会をさらに活性化する
	地域課題の解決をカリキュラムに埋め込む	探究	A		
	筑波大との高大連携を強化する	探究	A		
	地域資源を開拓する	校長	A		
竜一の価値を効果的に伝え支援者を増やす	視聴者目線で欲しい情報が効果的に取得できる学校 HP とする	マケ	A	A	・広報（プレスリリース）の強化、媒体の拡大などさらに効果的な発信に取り組む ・クラスごとの保護者や P T A 支部などのオンラインコミュニティを検討する。
	紙媒体の出版物の効果を評価し、取捨する	マケ	A		
	HP、SNS、ML などを通じ竜一の価値を発信しつながりを醸成する	校長、マケ	A		
	学校運営についての対外的な説明責任を強化する	校長	B		
	コミュニティごとの双方向コミュニケーションの場を構築する	マケ	C		

## 別紙様式2 (中高)

	地域に支えられた持続可能な部活動に転換する	部活の適正数を維持するための仕組みを作る (中高とも)	特活	B	B	・県方針にもとづき地域移行に向けた対応を推進する ・附属中担当を含めた顧問数／適正数の是正を行う ・附属中の公式な特活体制を設計・展開する
		附属中の特活体制を構築する (学活、生徒会、部活)	特活	C		
		教員の部活動に関わる労働時間を正準化する	管理職	B		
		休日の部活動を地域に移行する	管理職、特活	未		
		部活動の教育効果と学習活動との相乗効果を可視化する	DX	C		
		特別活動の多様性を上げる	特活	A		
国語	附属中 現代文では漢字力と語彙力を、古典では文法・句法を中心に、基礎学力を確立させる。	計画的に単元ごと的小テストを実施し、語彙力をつけさせる。		B	A	論理・読解力を高め、文章を的確委よめるようにする。古典を深く楽しむ態度を育てる
		現代文の授業において、論理的に文章を読解する姿勢を育てる。		B		
		基礎的・基本的な学習事項を段階的に学ばせ、国語に対する基礎学力を育成する。		A		
	1年 評論文、実用的文章、小説、古文、漢文を読むための知識及び思考力の基礎を養う。	読解や思考の前提となる語彙力を高める。また古典では正確に文法を理解する。		B	B	基礎知識の蓄積と、それを活用する言語活動などの水準を上昇させていくことが学力向上の鍵となると考える。
		ICTなども活用して、論理的に文章を読解し思考する力を育てる。		B		
		文学的文章の読解や言語活動を通して、思考の幅を広げる。		B		
	2年 現代文・古文・漢文のそれぞれの応用力を育成、進展させる。	各分野を計画的に学習させ、基礎から応用へのステップアップを図る。		B	B	
		現代語・古語の語彙力を確かなものにする。		B		
		授業や考査の中で大学入試を意識した問題の扱いを徐々に増やし、受験に対応できる学力を身につけさせる。		B		
	3年 現代文、古文、漢文の受験に対応した学力を完成させる。	受験を意識した授業の実践を心がける。		B	B	1,2年で積み重ねた学力を共通テストと記述のバランスを考えて完成させていく計画性
		小論文や評論に対応した、幅広い知識を身につけさせる。		B		
		知識問題についての段階的指導を完成させ、入試に対応する実践力を高める。		B		
地理歴史 ・公民	授業中心主義を徹底し、学力の向上を図る。	シラバスに基づき、担当者間の連携を図りながら、計画的かつ効果的な授業展開を通じて学力の向上を図る指導を行う。		A	A	新しく始まる地理総合、日本史探究、世界史探究の実践の成果の共有・深化を進める。
		授業内容を精選し、基礎・基本的事項の習得を徹底させるとともに、発展的な内容を扱う授業展開を行う。		A		
		新課程科目 (歴史総合・公共・地理総合) の導入と実践に向けて準備を進めるとともに、実践の成果の共有・深化を進める。		A		
		観点別評価に関する研究や、相互の手法に関する情報交換を積極的に進め、指導と評価の一体化を進める。		A		
		教科担当者が必要に応じて個別面談・個別指導を行い、指導・助言を通じて学習効果の向上を図る。		A		
		資料集など副教材の使用法を工夫し、生徒の興味・関心を喚起し、理解の進化に努める。		A		
	興味・関心が持てる授業に努める。共通テストで高得点を達成するとともに、難関大学に合格できる学力をつける。	BYODの導入にともない、ICT機器を活用した授業を推進する。		A	A	ICT ソフトウェアの共有化や授業公開を進めることで、教科全体の指導力向上を図る。
授業公開や教科会等を通じて、相互の指導方法について情報交換を行う。			B			
過去のセンター試験問題や共通テスト試行問題等ならびに大学入試問題等を十分に研究し、学習指導の改善を図る。			A			

## 別紙様式2 (中高)

数学	附属中 様々な数学的な見方考え方を学び、数学に対する関心・意欲を高め、学習習慣および中学校数学の基礎を固める。	日々の授業において、内容を精選し基礎の確実な理解と定着を図る。	A	A	学年によって小テストの頻度に差が生じていたので定期的に実施していきたい。	
		授業と連携した宿題を定期的に課し、家庭における学習習慣と基礎学力の確立を図る。	A			
		定期的に小テスト、章末テスト等を企画し、基礎学力を評価するとともに、そこで得た情報を基に弱点の強化を行う。	B			
	1年 様々な数学的な見方考え方を学び、数学に対する関心・意欲を高め、学習習慣および高等学校数学の基礎を固める。	日々の授業においては、内容を精選し基礎の確実な理解と定着を図る。	A	A	生徒がより主体的に活動できる場を増やし、数学に対する関心・意欲を高めていきたい。また、学習習慣を徹底し、基礎学力の向上を図る。	
		デジタル機材を通して、教材表示や、課題配布を行う。	A			
		授業と連携した宿題を定期的に課し、家庭における学習習慣と基礎学力の確立を図る。	A			
		定期的に小テスト、章末テスト等を企画し、基礎学力を評価するとともに、そこで得た情報を基に弱点の強化を行う。	A			
	2年 科目の重要性を意識させ、きめ細かい指導の下、授業内容を確実に定着させる。	学習に取り組みやすく、理解を深められるように授業展開や進度の工夫をする。	A	A	共通テスト、大学入試問題を分析し、大学入試に対応できる学力を完成させたい。	
		年間を通じて、精選した課題を与え、生徒の取り組みを徹底させる。	A			
		授業進度に合わせて定期的に章末テストを実施し、基礎学力の定着と向上を図る。	A			
	3年 生徒の進路実現に向け、大学入試に対応した学力を完成させる。	大学入試を意識した授業の実践に心掛ける。	A	B	教科書の内容はペース良く進めることができたが、大学入試に対応できる記述力の定着には不十分であった。	
		各テストを通して、大学入試に向けた計画的な学習を支援していく。	B			
各分野の問題演習を行うことにより、大学入試に対応できる能力を養う。		B				
理科	授業内容を深化させ、各生徒が希望進路を実現できる基礎学力の向上を図る。	シラバスに沿った授業展開を心がけ、担当者間のコミュニケーションを図り計画的な指導を行う。	A	A	次年度も計画的な指導を徹底していきたい。 生徒の意欲・関心を高め続けるような内容を心掛けたい。 個別指導の徹底を図ること。	
		生徒にとって適切な内容・分量の課題を行わせることや、小テストを通して学習習慣の確立を図る。	A			
		必要に応じ、各科目の担当者が個別の面談・指導を行い、学力の向上を図る。	B			
	自然や自然現象に対する興味・関心を高め、知識の活用能力と思考力を高める授業展開に努める。	観察・実験をバランスよく実施し、実物に触れることにより、興味・関心を喚起し、基礎的概念理解の深化を図る。	A	A	視覚・聴覚を刺激するような観察実験を実施し、深化を図ること。 教科書よりも高いレベルの知識を理解させていくこと。 毎時間ごとのICT教材の取入れを徹底したい。	
		SSH事業と連携し、日常現象と科学との関連を取り上げることにより、科学への興味・関心を高め、知識の活用を促す。	A			
		ICTを活用してシミュレーションや視聴覚教材を効果的に提示することで、授業への興味・関心を高め、より深い思考力を育てる。	A			
	体育	各種の運動の合理的な実践及び相互理解・尊重の態度を育む。	自己の体力や生活に応じた体力を高めるための運動を合理的な方法で身につけさせる。	A	A	自己の更なる体力向上に向けて意識の底上げを目指していきたい。
			各種の運動の合理的な実践を通して自己の課題を見つけ、解決できる能力を身につけさせる。	A		
			各種の運動を通しての相互理解・尊重の態度を身につけさせ、コミュニケーション能力を育てる。	A		
熱中症や怪我を防止するため、安全管理に留意して授業を行う。			A			
健康に対する意識・実践力を育む。		健康に対する知識や実践力を養い、課題解決能力を身につけさせ、明るく豊かで活力ある生活を育む態度を育てる。	A	A	社会の諸課題に対応して求められる資質能力を育み、安心で安全な社会づくりに貢献できるよう、学びに向かう力を育成していきたい。	
		社会生活及び各個人の生活における健康・安全管理について、課題の解決に役立つ基本的な知識を理解する。	A			
	ICTを活用して視聴覚教材を積極的に提示することで、授業への興味・関心を高め、より深い理解を促す。	A				

## 別紙様式2 (中高)

芸術	芸術を愛好する心情を育てるとともに、芸術の諸能力を伸ばし芸術文化についての理解を深める。	表現及び鑑賞の活動において、ICTを効果的に活用する	A	A	
		多様な芸術表現を経験する中で、他者と協働しながら表現を生み出したり、表現したりするための技能を身に付ける。	A		
		日本や諸外国の芸術作品を鑑賞し、理解を深める。	A		
英語	附属中 英語に対する意欲及び興味・関心を高め、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域について基礎学力の定着を図る。	毎週単語小テストを実施し、基本的な語彙を身につけさせる	B	B	コミュニケーション中心の授業を行ったが、文法・語彙指導を充実させる必要がある。
		基本的文法事項を習得させ、英文を読む力と書く力を培う。	A		
		授業や家庭学習でリスニングの指導に力を入れ、英語を聞く力を養う。	B		
		ALTとのチームティーチングを通して、話す力やコミュニケーション能力を育てる。	A		
	1年 主体的・自律的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能5領域について基礎学力の定着を図る。	BYOD 端末を活用し、効果的なライティング活動を取り入れる。	B	A	4技能5領域の継続的な指導に加え、生徒の、学習に対するさらなる動機付けを行い、生徒が主体的に学び、自身の能力を改善する姿勢を身につけさせたい。
		ICTを活用し、国内外の情報を授業に取り入れる。	B		
		教員間の連携を強化し、指導の明確化や生徒の適切な評価につなげる。	A		
		ALTとのチームティーチングを通して、話す力やコミュニケーション能力を育てる。	A		
		外部英語検定受験を奨励し、CEFR A2レベル(英検準2級以上)の力を身に付ける。	A		
		ディベート活動やオンライン英会話を通して、思考力と表現力を身につける。	B		
	2年 基礎力の増強および応用力育成・向上に努めるとともに、「読む」「書く」「聞く」「話す」の4領域に加え、論理的思考力の向上を目指す。	毎週単語小テストを実施し、大学入試に必要な語彙を身につける。	A	A	来年度の受験学年として入試に必要なリーディング・ライティング力の向上に加えて、さらなる批判的思考力を養うべく、多種多様な分野を題材にした教材を提供する。
		基本文法事項を習熟させ、英文を読み要約する力と、論理的に書く力を高める。	A		
		授業や家庭学習でのリスニング学習を定着させ、英語を聞く力を養う。	B		
		ALTとのチームティーチングを通して、自然な英語表現を使って自己の考えを述べる力を身につける。	A		
		外部英語検定受験を奨励し、CEFR B1以上の力を身につける。	B		
英語によるディベート活動やディスカッション活動を実施し、英語の運用能力と論理的思考力を身につける。		A			
3年 生徒の希望進路の実現に向け、受験に対応した学力を完成させる。	平常の授業において、受験に対応した総合的な学力を高めさせるとともに、新しい入試形式を研究し、対応できる英語力の育成を図る	B	A	共通テスト対策として、教員がより具体的な解法のコツを自主研修して全てのレベルの生徒に還元できるように努める。	
	各テストを通して、受験に向けた計画的な学習を支援していく。	A			
	生徒の状況に応じた課外授業及び個別指導を実施する。	A			
	授業・指導法の研究に努め、平常授業の充実を図る。	A			
家庭	家族や家庭生活に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させる。	実生活に即した具体例の提示や実践活動を通して、家庭のあり方や家族関係についての基礎基本を習得する。	A	A	実験、実習の機会を増加させ、さらなる技能の向上を目指す。
		家庭や地域の生活上の課題を見つけ解決する能力を育成する。	A		
	生活の充実向上を図る力と実践的な態度を育成する。	生活の中心から課題を発見し、解決するための事例研究を行い、学びを深める。	A	A	金融教育、成人教育等を含め課題発見の着眼点の拡張と解決法の深化を目指したい。
		ICT機器等を利用し、事例や演習の充実を図り、生徒が主体的に取り組む態度の育成を図る。	B		
情報	生徒のICT活用能力を育て、それらを積極的に問題解決に活用しようとする態度を身に付けさせる。	実生活に即した実践的・体験的学習を通して、一人で生活する能力を習得する。	A	A	さらにICT機器の活用の幅を広げ主体性を引き出す場面を工夫する。
		Google Suiteの機能を活用した問題解決能力を育成する。	A		
		プログラミングとそれを用いた問題解決能力を育成する。	A		
		教科横断型の授業を実施し、深い学びを実現するとともに、生徒にICTを学習および生活に活用する態度を育成する。	B		ICTを活用した授業を実践した。教科横断的授業は部分的に実勢出来たので、継続・発展的に行いたい。

## 別紙様式2 (中高)

	生徒に情報技術や情報社会について理解させるとともに、様々な場面で適切な判断や行動ができるようにする。	情報技術に関する本質的で深い理解を促す授業を実践し、試験に対応できる十分な学力及び思考力を育成する。	A	A	情報社会で活躍できる人材の育成を目指した授業の実践を行った。定量的な評価指標の開発が課題。
		情報を適切に扱い、表現できる情報デザインの知識と技術を身に付けさせる。	B		
		情報技術の活用や、情報社会での生活における正しい態度と行動がとれるように、具体的な場面で指導する。	A		
	生徒の探究活動に必要な資質、および能力を育成し、社会参画の意欲および起業家精神を育てる。	和算の探究を通じて探究活動の技術を身に付ける。	A	A	グループでの探究やポスター発表、AIサービスの開発など、探究的な授業実践を行った。さらに進めたい。
		身の回りや地域の課題を解決するAIサービスの提案と実装を行う実践的授業を行う。	A		
		公的統計データを含むデータの活用と分析を行う授業を実践する。	A		
附属中	基本的生活習慣の確立	服装や言葉遣い、時間やルール遵守を中心に、自律した学校生活を送れるよう、授業や学校行事、休み時間等を通して、教員間や家庭と連携して指導する。	B	B	全体、個別の指導により基本的な生活習慣は確立しているが、生徒の8.8%は生徒指導の合理性に不満を抱いている。ルールの見直し等生徒会を中心とした取組が必要である。
	学習習慣の確立と学力の向上	面談やICTを活用し、予習・復習や家庭学習の状況を把握し、個の能力や環境に合わせて適切に指導する。 生徒の興味や関心、個性を教育活動で引き出し、コンテスト等何事にも積極的かつ貢献的に挑戦しようとする機会を設ける。 少人数学習の実施やICTの活用を通して、個に応じた学習指導を展開する。 中高一貫教育校の強みを活かして、学習の先取りや深い学び、異年齢学習、探究的な学習を実践し、生徒の能力の伸長を図る。	A	A	手帳やICTを活用した家庭学習状況の把握により、97.0%の保護者が「生徒の学習姿勢・態度が身についている」と捉えている。 自主課外活動の開設により、各種コンテストでも全国レベルの成果をあげている。
	進路指導の充実	企業・研究所訪問や外部講師による講演会、模擬授業等を通して、知識や思考力の向上を図るとともに将来の職業について考えさせる。 語学研修やICTを用いた海外の中高生等との交流により視野を広げ、世界に羽ばたく人材の育成を目指す。	B	B	外部講師による授業により、仕事観、将来の職業について考える機会を設けたが、海外との交流は実現できていない。 進路指導に対する生徒の満足度が94.7%と他項目より低いため、計画の見直しが必要である。
	心身の健康管理	複数担任制を展開し、多感な年齢の生徒のみならず不安を抱える保護者へのサポートの充実を図る。 年間3回以上の面談を実施する。また、教員間や保護者、スクールカウンセラーと連携し、心身ともに健康な学校生活を送れるよう支援する。	B	B	年間3回に加え、随時面談等を実施、保護者、SC、医療機関等とも連携を図っているが、1年生1名、2年生7名が不登校傾向にある。(前年比+3名)3年生1名は解消した。

## 別紙様式2 (中高)

	働き方改革	公立学校の教師の勤務時間の上限に関するガイドライン(文部科学省)に則り、在校等時間(校外での勤務を含む)について1か月の超過勤務45時間以内、1年間の超過勤務360時間以内を目指す。そのために原則定時の出退勤と有休・代休の消化を心掛け、仕事の精選と分散、ICTの活用等で会議や仕事の効率化・生産性を向上させる。	B	B	ICTの活用による仕事の効率化を図ったが、45時間超が延15名(前年比-11人)と0にはならなかった。
第1学年	生活習慣の確立とコミュニケーションの促進	挨拶の励行や、時間・期限の厳守等、凡事徹底を図り、安定した生活習慣を確立させる。また、教師と生徒、生徒通しのコミュニケーションを促進し、学年内の人間関係を活性化する。	B	B	多くの生徒が安定した生活を送っている。
	基礎学力の定着と自立学習の充実	初期指導の充実を図り、授業を中心とした予習復習のサイクルが確立できるよう、授業およびホームルーム・学年集会を通して継続的な指導に取り組む。	B	B	模試の結果を分析する限り、基礎の定着に加えて、新傾向問題への対応が課題になると考えられる。
		生徒が授業内容を確実に定着できるよう、各教科で連携して課題の量を調整するとともに、ICT端末を活用した学びを積極的に取り入れて、学習意欲と協働的学習の質の向上を図る。	B		
		手帳を活用しながら、自主的に計画を立て行動する力を身につけさせる。	A		
進路指導の充実	LHRおよび道徳の授業を中心として、進路意識が高められるように年間計画を立案し、将来の目標や職業観などを育む指導を行うとともに、2年次の文理コース選択に対して適切な指導を行う。	A	B	特にFMTにて、オンラインではなく、各所へ実際に訪問できたことは大いに生徒の刺激とすることができた。生徒の心身状況については、問題を抱える生徒を中心に、次年度も適切なサポートを継続していく。	
	進路指導部や探究部、DX、グローバル・改革プロジェクトと連携し、生徒の進路目標の設定に意義のある行事を企画・実施する。	B			
	生徒の勤労観・職業観を育むために、卒業生やPTAと連携した講演会を企画・実施する。	B			
心身の健康管理	生徒一人一人の心身の成長とともに、健康的な学校生活が送れるよう、保健部やスクールカウンセラー、保護者と連携しながら、生徒個々の問題の早期発見に努め、適切な指導を行う。	B			
第2学年	基本的な生活習慣の確立	挨拶の励行、清掃の徹底、容儀指導の徹底、時間厳守、期限厳守等の凡事徹底に加え、部活動と学習の両立をはかり平日2時間・休日3時間以上の学習時間を確保できる生活習慣・学習習慣を身につける。	B	B	部活動と学習の両立へのサポートの必要性
	学習習慣の確立と基礎学力の定着	授業を中心とした予習復習のサイクルの確立と家庭学習時間の確保ができるよう、授業およびホームルーム・学年集会を通して継続的な指導に取り組む。	B	A	手帳を使用して、受験スケジュールなどの自己管理、決まった時間に学習できる習慣の定着を図る。
		生徒が授業内容をしっかり定着できるよう、各教科で連携して課題の量を調整するとともに、ICT技術を活用し、生徒の課題への取り組みおよび定着が徹底されるように指導する。	A		
		手帳を活用しながら、主体的に計画を立て行動する力を身につけさせる。	B		
		文系理系を問わずすべてのコースにおいて進路・学校行事に合わせた探究活動に取り組みせ、論理的思考力、問題解決能力を向上させる。	A		
進路指導の充実	LHRや進路行事などを通じて自分の進路希望を具体化させ、大学の学部・学科研究やRガイダンス等を通じて進路意識を高める。	A	A	多様化する受験制度に対応する情報収集力を高める。進路指導部との連携をより強化する。	
	進路指導部と連携し、入試改革に伴う各大学の入試情報の収集・生徒、保護者への提供を徹底し、生徒・保護者が安心して大学受験に臨めるよう配慮する。	A			
	進路指導部、SSH委員会、国際交流委員会と連携し、生徒の進路目標設定に意義のある行事を企画・実施しながら、将来グローバルに活躍する人材育成に努める。	A			
心身の健康管理	生徒一人一人の心身の成長とともに、健康的な学校生活が送れるよう、保健部や保護者、スクールカウンセラーと連携し、生徒個々の問題の早期発見に努め、適切な指導を行う。	A	A	学習時間調査の「悩み事調査」の活用	
第3学年	学力の向上	2年次までの取り組みを継承し、予習・授業・復習のサイクルの重要性を踏まえながら、さらに発展的学習に自主的に取り組む姿勢を養う。	A	A	学年の教科担当が各主要大学の出題動向を研究する時間や仕組みの創出
		各教科で、年度当初から入試を意識した指導を行い、適切な時期に、適切な課題・指示を与えるように努め、学年教科担当が相互に連携をとりながら、学習意欲の向上を図る。	A		

別紙様式2 (中高)

		定期考査・模擬試験の結果分析、大学入試問題の出題傾向の分析結果を授業に反映させ、授業内容の充実を図るとともに、受験勉強のペース・指針を生徒に示し続ける。	B		
基本的な生活習慣の確立		最上級生として、後輩の模範となるよう規律ある生活に努め、学校行事や部活動において、それぞれの持ち場で中心的役割を果たせるよう支援する。	B	B	手帳を中心とした自己管理指導について、意義の再確認・指導法の再検討
		手帳を活用しながら、学習を中心とした毎日の生活習慣を自己管理させるとともに、長期的な目標にむけて自主的に計画を立て行動できるよう支援する。	B		
進路指導の充実		生徒の学習成績や進路情報を学年で共有し、生徒や保護者に有効に提供できるようにする。	B	B	高い志望を維持させると共に、実力相応校・滑り止め校の大学研究ができる機会を作る。(茨城大学説明会など)
		LHR、学年集会、講演会等を通して、入試や志望校の研究に努め、目標に向かって邁進する環境・雰囲気醸成する。	B		
		生徒との面談や保護者との意思疎通を密にし、必要に応じて学年外の職員の協力を得ながら、適切な進路指導ができる態勢をつくる。	B		
心身の健康管理		生徒が心身ともに健康な学校生活を送れるように留意し、生徒の問題の早期発見に努め、教育相談部や養護教諭、保護者と連携しながら適切な支援を行う。	A	A	学習時間調査の「悩み事調査」の活用

※ 評価規準：A (達成された)、B (ほぼ達成された)、C (達成されなかった)